論　文

パストラルケアにおける３つのパースペクティブ

── C・ドーリング（Carrie Doehring）のポストモダンモデル

才　藤　千津子
同志社女子大学
現代社会学部・社会システム学科
准教授

Three approaches to pastoral care:

The postmodern model of Carrie Doehring

Chizuko Saito
Department of Social System Studies,
Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Associate Professor

Abstract

In the field of Protestant pastoral care and pastoral theology, there has been a dramatic transformation since the 1980s. Today the field of pastoral care ought to examine its postmodern consciousness and raise questions regarding how the experiences of people are shaped by who they are and the context in which they live. In this paper, the author introduces the pastoral care model of Carrie Doehring, who views pastoral care through a trifocal lenses (premodern, modern, and postmodern), and then shows how we can apply Doehring's model to the Japanese through the story of a Japanese woman living in the United States. In her concluding remarks, the author discusses the pressing issues that she faces in her practice of pastoral care and proposes possible future directions for pastoral care in the Japanese context.

Ⅰ　はじめに

この小論では、アメリカコロラド州デンバーにある神学大学院で教鞭をとる牧会神学者キャリー・ドーリング（Carrie Doehring）の『パストラルケアの実践：ポストモダンアプローチ *The Practice of Pastoral Care: A Postmodern Approach*』（2006）に示された「プリモダン（premodern）」、「モダン（modern）」、「ポストモダン（postmodern）」という３つのレンズを通してパストラルケアを実践する試みを紹介する。また、アメリカ在住の日本人女性のケースを例に挙げてケアの実践における７つのステップについて検討し、筆者が現在日本の現場において直面しているパストラルケアの課題について、ドーリングの言葉を引用しながら考察したい。

本論文で取り扱う「パストラル（pastoral）」ということば[1]は、ラテン語の「pastor（牧羊者）」から派生したキリスト教神学用語である。旧約聖書には、古代イスラエルの預言者が人々の群れを教え導いてゆく様子が生き生きと描かれているし、新約聖書には、羊飼い（牧師）が迷える羊たち（信徒）を支え導くたとえ話が出てくる。新約聖書におけるイエスの典型的イメージは、人々をいやし、支え導く「よい羊飼い」であるように、キリスト教では、牧師の働きを、荒野の中をさまよう羊を導く「羊飼い」のイメージによって説明することが多い。イエスの人生の舞台

であった紀元1世紀のパレスチナ地方にあっては、羊や羊飼いの存在が人々にとって身近なものだったのである。加えて、プロテスタント宗教改革以降は、万人祭司制と「信仰のみ」による救いの教えのもと、個人の悔い改めと神との和解への導きにパストラルケアの力点が置かれてきた。「パストラルケア」ということばの定義はさまざまだが、キリスト教の伝統においては主に、牧師のさまざまな働きのうち霊的（スピリチュアル）なケア、生の意味の問題、究極的な価値の問題に焦点を当てた「魂への配慮」のことを指してきたのである。

また本稿でしばしば使われる「牧会神学（pastoral theology）」とは、教会や学校、病院などのキリスト教コミュニティで実践される「パストラルケア」を含めた牧会（牧師職のはたらき）全般に対して神学的考察を加える営為であり、いわば、牧会実践の神学である。牧会神学は、牧会に従事する者が、自らの神学を実際の牧会やキリスト教の伝統と対話させるプロセスの中から生まれてくる。今日では、キリスト教神学に加えて、社会学や心理学など近接諸学問との学際的対話のもとでこそ牧会神学がより有効なものとなると考えられている（Burck & Hunter, 1990他）。

欧米のプロテスタント教会において「牧会神学」という用語が礼拝や説教などの牧会の機能を包括的に指す用語として初めて使われたのは、18世紀半ばであると言われている（Mills, 1990, 836-844）。当時牧会神学は、説教学や礼拝学などと同様に牧師養成のための実践部門の一部だとみられており、独自の学問的方法を持った領域とはみなされていなかった（Hunter, 1980）。牧会神学が独立した学問領域として認められるようになるのは、牧会神学が心理学や社会学の成果から多くを学び、臨床訓練を神学教育に取り入れながら独自の方法を模索し始めた20世紀前半以降である。

1920年代には、アメリカ会衆派の牧師ボイセン（Anton Boisen）やカボット（Richard Cabot）らによって神学教育に初めて臨床訓練が取り入れられた。また、1960年代から1970年代にかけては、精神医学や心理療法に強い影響を受けてパストラルカウンセリング[2]が興隆した。アメリカでプロテスタント教会を中心にした「パストラルケアムーブメント（pastoral care movement）」が発展したのがこの時期である。この運動が「臨床経験」を重んじ個人の魂のニーズと人間関係のダイナミクスへの洞察をパストラルケアにもたらしたことは、キリスト教会に対する大きな貢献であった。

しかし1980年代以降、パストラルケアが心理療法の臨床的モデルに偏りすぎたことに反省がみられ、パストラルケアは、教会が提供する「魂のケア」としての本来の宗教的、神学的アイデンティティを回復すべきだと考えられるようになった。また、急速にグローバル化する世界が抱える差別や貧困など、さまざまな倫理的課題に答えることも、パストラルケアや牧会神学の重要な使命として議論された[3]。

この小論で紹介するドーリングの著書『パストラルケアの実際：ポストモダンアプローチ *The Practice of Pastoral Care: A Postmodern Approach*』は、現在北米の神学大学院でパストラルケアのテキストとしても使われている。同著においてドーリングは、宗教的にも文化的にも人種的にも多様な今日のアメリカ社会において、具体的にどのようにパストラルケアの実践や牧会神学の考察を進めてゆけば良いのかを説明しようとした。彼女は、「プリモダン（premodern）」「モダン（modern）」「ポストモダン（postmodern）」という3つの視点を縦横に使い分けながらパストラルケアを提供する方法を示したが、そのことによって、変転する現代社会におけるパストラルケアや牧会神学のひとつの有効な方法を示したといえるだろう。

以上のように本章では、パストラルケアの大きな枠組みを説明し、20世紀北米の主にリベラルな立場のプロテスタント教会におけるパストラルケアと牧会神学の流れを説明したが、第2章では、ドーリングが提唱した「プリモダン」「モダン」「ポストモダン」という3つのパースペクティブそれぞれの特徴と課題について紹介する。第3章では、パストラルケアを求める人がアメリカに住む日本人女性である例を想定し、ドーリングの7つのステップに従った場合、実際のパストラルケアのケースでは何をどのように考察すればよいのかを検討する。そして最後に、筆者が日本の現場において直面している課題について述べ、日本におけるパストラルケアの今後の方向性についてドーリングの立場から見た場合に言えることについて簡潔に論じたい。

Ⅱ　パストラルケアにおける3つの視点

前述のように、牧会神学者キャリー・ドーリング（Carrie Doehring）は、パストラルケアに対して、「プリモダン（premodern）」「モダン（modern）」「ポストモダン（postmodern）」という3つの観点からアプローチすることを提唱した。ドーリングは、ほとんどの人が、自覚しているかいないかに関わらず、これらの視点、特に最初の2つの視点を用いながら日々のパストラルケアを実践してい

る現状（Larty, 2003, 2）を、わかりやすく整理してみせたともいえる。ドーリングの方法の中で彼女のユニークさを特徴付けているのは、「プリモダン」「モダン」に加えて「ポストモダン」という新しい観点を示したことである。

ドーリングは、パストラルケアの実際においてこの３つの視点をどのように使い分けてゆくかを、「三焦点レンズ」の比喩を用いながら説明した。近くを見るとき、中距離を見るとき、遠くを見るときに応じて自在に使い分けることができる「三焦点レンズ（trifocal lenses）」のように、時と場合によって適切にまた縦横に３つのレンズを使い分けてゆくことが大切だと主張したのである（Doehring、2006、5）。この章では、上の３つの観点のそれぞれの特徴と課題について説明したい。

１．プリモダンレンズ（Premodern lens）

⑴　特　　徴

ドーリングの言う「プリモダンレンズ」に基づく方法というのは、古代から中世にかけてキリスト教会が育んできた伝統的な神学や方法に基づいたパストラルケアを指す。このレンズによるアプローチでは、ケアを求める人が神とのつながりを感じた宗教体験、「聖なるもの」の経験に焦点が当てられる。聖なるものは、聖書やさまざまな宗教儀式や宗教体験、神の臨在を感じる体験、讃美歌、聖礼典、イコンや聖像、信仰の共同体（教会）、自然美、芸術、日々の祈りなどを通して、人々に感知される（Doehring, 2006, 2-3）。

⑵　課　　題

このレンズで見る場合の最大の長所として、ドーリングは、古代から中世にかけてのキリスト教会の豊かな遺産をパストラルケアに援用することができる点を挙げている（Doehring, 2006, 4）。キリスト教の牧師のイメージを思い浮かべるとき、多くの人の頭にすぐに思い浮かぶ姿は、「病人のベッドサイドで、病人のために聖書を読み、頭を垂れて祈っている姿」であり、「教会での礼拝に集まった人々の前で聖書を読み上げ、説教をし、聖餐式を執り行っている姿」であるのはいうまでもない。また人によっては、「葬儀を執り行い、オルガンの演奏に耳を傾け、皆で賛美歌を歌うように司式する姿」「十字架の前でひざまずいて祈っている姿」を思い浮かべるかもしれない。これらはすべて、このレンズの視点から見えてくるパストラルケアのアプローチである。

しかし、もし21世紀の現代においてもパストラルケアにおいてこのレンズ「しか」使われなかったとしたならば問題である[4]。たとえば、愛する家族の一人がうつ病をわずらって悩んでいる人に、「聖書を読んで祈りましょう」というだけで充分だろうか。うつ病という病気についての心理学、精神医学の研究（以上モダンレンズ）を知らないままで、適切なパストラルケアが提供できるだろうか。

またこのレンズ「だけ」によってケアが提供される場合、往々にして、各教派の伝統的教義や宗教経験を通して「のみ」聖書が理解されることになる傾向がある。現在でも、近代的聖書解釈について保守的な立場をとる人々は、聖書は神の直接の啓示の書物と考えて、聖書を絶対的真実として字義的に解釈することがある。たとえば、同性愛の問題や離婚の問題に悩む人がケアを求めてきたとしたらどうだろうか。両者ともに否定的な見解を持つ伝統的聖書解釈や神学に基づくだけで、適切なケアができるだろうか。このように、このレンズに偏ったパストラルケアの問題点は、後述する近代以降の聖書学や神学の成果をパストラルケアに生かすことができないことである（Doehring, 2006, 6）。

２．モダンレンズ（Modern lens）

⑴　特　　徴

ドーリングは、パストラルケアにおける学際的アプローチの重要性を強調する（Doehring, 2006, 168-169）。牧会神学は、神学に加えて心理学や社会学など社会科学諸科学によって学際的に研究される。モダンレンズによるアプローチの特質は、近代聖書批評学[5]の成果や、19世紀以降、とくに20世紀に入って急速に発展したグリーフや死、ストレスについての心理学や医学の知見、現代神学の成果をパストラルケアに援用する点である（Doehring, 2006, 3）。

たとえば、幼い娘を突然の事故で失って悲嘆にくれている若い夫婦に対してパストラルケアを提供する牧師は、カウンセリングの方法から学んだ「傾聴」の方法によって二人の話に対して共感的によく耳を傾けることから始めるであろう。それから、突然愛する娘を亡くした両親はどのようなグリーフ（悲嘆）を経験するのかについて臨床心理学を参考に考えるであろう。加えて、彼らの悲しみを神学的にどのように理解したら良いのか、近代聖書批評学や現代神学の成果をよりどころとして神学的に問いかけるだろう。そして、たとえば旧約聖書詩編や創世記の物語に描かれている人々の悲しみについて、さまざまな解釈がなされてきたことを知ることができるだろう。

⑵　その課題

20世紀、「モダンレンズ」によるパストラルケアへの「臨床的アプローチ」が発展したのは「はじめに」で述べた通りである。聖書で「あなたの隣人を愛しなさい」と言われていることを、具体的にどのように実践すれば良いのか、苦しんでいる人をいやしてゆくにはどうしたらいいのかをめぐって、パストラルケアは、医学や心理臨床の実践から多くを学んだ。

しかし、ケア提供者がこのレンズに偏ったケア「しか」提供しない場合には、「プリモダンレンズ」や「ポストモダンレンズ」から生じる大切な意味が見落とされてしまうかもしれない。たとえば、前述のように幼い娘を突然の事故で失って悲嘆にくれている若い夫婦に対してパストラルケアを提供する場合、喪失体験やグリーフ（悲嘆）のもつ心理学的意味や聖書学意味は吟味され、適切なカウンセリングが提供されるかもしれないが、それ以外の意味 ── たとえば、ケアを求めている人は今どのように祈ってほしいと思っているか、礼拝にどのような慰めを求めているか、今ここで聖書のどの箇所を読んでほしいと望んでいるか（以上「プリモダンレンズ」）、その出来事が起こったコンテクストはどのようにその人のグリーフに影響を与えているかについての考察（「ポストモダンレンズ」）など ── は検討されないままに終わってしまうかもしれない。

3．ポストモダンレンズ（Postmodern lens）

ドーリングによれば、以上述べてきた「プリモダンレンズ」、「モダンレンズ」を補完するレンズが、「ポストモダンレンズ」である。

⑴　特　　徴

1960年代以降ベトナム戦争への反対運動や公民権運動などを経験したアメリカでは、教会（特にリベラルな立場をとるプロテスタント教会）も黒人解放の神学や女性解放の神学から大きな影響を受けた。パストラルケア研究においても、1980年代以降、人間の苦悩や悪の背景にある「社会構造」や「社会権力」の問題がさかんにとりあげられ、アメリカ社会における女性差別、貧困、人種差別、家庭内暴力や虐待などへの取り組みの必要性が強く訴えられた。また、人が生きている社会的コンテクストがその人のものの見方や考え方を作り上げていることを、パストラルケアの実践においても自覚する必要があると論じられた。

社会構成主義の立場に立つドーリングは、知識は社会的に構成されると考える。危機にある人の反応もケアギバー（caregiver）[6] の対応も、その人の個人史はもちろん、ジェンダーや人種や社会階層や年齢などさまざまな要素によって、複雑に構築される。

パストラルケアにおいては、ケアを受ける人だけではなく、ケアギバー自身も、自分が生きるコンテクストのなかでどのように自分の経験が形成されてきたかについて吟味しなければならない（Doehring, 2006, 3）。適切なパストラルケアを提供するためには、ケアギバーとしての社会的特権的立場を自覚し、自らのものの見方の前提を相対化した上で他者の世界観・価値観と出会ってゆこうとする謙虚な自己省察の作業が必要となる。パストラルケアに携わる人は、自らのあり方（対自己関係）と他者との関わり（対他者関係）の双方を常に確認しながら、常に自らの世界観を新たにし続けねばならない（Doehring, 2006, 167-168）。厳しい階級差が確立している軍隊のミリタリー・チャプレン（従軍牧師）の臨床訓練にも携わっているドーリングは、ケアの関係は、自分が関わるケアにどのような権力関係が影響を与えているかを厳しく吟味することなしには決してうまくいかないと言う（Doehring, 2012, 2-1）。たとえば、牧師が教会でもっている宗教的権威の影響力の大きさを考えるとき、パストラルケアに携わる牧師は、自らの宗教者として特権的立場がどのように自分のケアに影響を与えているかについて配慮しなければならないのである。

⑵　課　　題

ドーリングによれば、このアプローチ「しか」とらないケアギバーがいたとしたら、その人が冒す危険は、危機の中にある人が、祈りなどの神との直接的なつながりや礼拝などの伝統的な宗教儀式を切実に求めているかもしれない（「プリモダンレンズ」）にもかかわらず、そのことに気づかないことである。たとえば、人は神について「素朴に単純に」語ることはできないという考えから、神について語ることをいっさい放棄してしまったり、宗教経験について触れるのを避けたりするのがその例である。またこの観点にだけ立つ人は、神について多様な視点から議論をすることに気を取られて、人々の霊的な導きや慰めに役立つような伝統的な宗教的行為を実践する（「プリモダンレンズ」）ことを躊躇し、その結果、聖書や祈りや宗教儀式に救いを求めている人々を危機の中に取り残してしまう恐れもある（Doehring, 2006, 5）。

以上みてきたように、パストラルケアに携わるものは、「プリモダン」から「モダン」へ、また「ポストモダン」

へと、「三焦点レンズ（trifocal lens)」を着用したときのように、状況に応じて視点をシフトさせ自由にレンズを使い分けることを学ばなければならない。それによって初めて、古代から現代までのキリスト教の長い歴史の中で培われてきたすべての遺産を利用してケアにあたることができるというのがドーリングの結論である。

Ⅲ　パストラルケアの実際 ── ７つのステップ

以上述べて来た３つのアプローチは、実際のパストラルケアにおいてはどのように実践されるのだろうか。「プリモダン」から「モダン」へ、また「ポストモダン」へと、状況に応じて視点をシフトさせ使い分けるというのは、具体的にはどういうことだろうか。また、ドーリングはアメリカに生きるさまざまな人種的文化的背景を持つ人々を読者と想定して本を書いたとしているが、パストラルケアを求める人がアメリカに住む日本人女性である場合、どのようなことが考慮されなければならないだろうか。この章では、ドーリングの７つのステップに従った場合、実際のパストラルケアのケースではどのような点をどのように考察すればよいかについて検討する。

パストラルケアの提供者は、まず「プリモダンレンズ」を使って神や「聖なるもの」と支援を求める人とのつながりを確認し回復することから始め、次に「モダンレンズ」を使って心理学的に社会学的に何が起こっているのかを理解しようとすることが多い。それから「ポストモダンレンズ」を使って、支援を求める人の経験がどのように構成されているか、コンテクストはどのようなものかを検討することになる。しかし実際には、これらのステップが最初からきちんと順に進んでいくわけではない。実際のケアの現場においては、以下の７つのステップを何度も行ったり戻ったりしながらケアが進んでゆくと考えた方がより現実的であろう（Doehring, 2006, 9)。

なお、この章で例に挙げるのは、アメリカ、カリフォルニア州に住む日本人女性がカリフォルニア日系教会の牧師にケアを求めて来たという設定の架空のケースである。このケースは、2000年８月から2001年８月までと2012年４月から2013年３月まで、アメリカ、カリフォルニア州サンフランシスコ近辺で筆者が行った聞き取り調査の中からいくつもの例をつなぎあわせて作り上げたものであり、実際に存在する特定の人物について述べたものではない。

まさこさんのストーリー：

ある日、カリフォルニア州北部の日系人教会の牧師は、まさこさんの訪問を受けた。

牧師は、日本から日系教会に派遣されてきた30歳代後半の日本人女性で独身である。日本でいくつかの教会で働いたあとにカリフォルニアの日系教会の牧師として招聘されて５年目であり、あと数年のうちには教会を後任に譲り日本に帰国することを考えている。まさこさんは、牧師が牧会をしている日系人プロテスタント教会の日語部（日本語を母語とする人たちのグループ）のメンバーであり、教会の近くに住んでいる。

まさこさんは、現在58歳の女性。３年前に長年連れ添ったアメリカ人の夫をがんで亡くした。牧師のまさこさんに対する印象は、もの静かでおだやかな人だが、何かをしようと決めたら黙々とやり抜くような強さを秘めた人だということである。まさこさんの夫が亡くなったことは牧師も教会のメンバーも知っていたが、彼女がその日牧師に話したようなことを悩んでいることは、誰も知らなかった。人から好感を持たれるまさこさんだが、教会内に心を打ち明けられる親しい友人はいなかったようだ。ただ牧師は、最近まさこさんが元気がなく教会も休みがちであることに気づいていた。まさこさんから教会に電話があり、相談したいことがあると言われたのは、そんなときだった。

約束の時間通りに教会にやってきたまさこさんは、牧師に次のように話した。彼女が訴えたのは、夫を亡くした悲しみから立ち直れないこと、娘が家を出て行ってしまったこと、最近夜よく眠れないこと、神を信じられない気持ちになっていることなどであった。

まさこさんは、このところずっと孤独感と悲しみ、無力感と絶望感に苦しんできた気持ちを率直に牧師に話した。牧師はまさこさんの語る言葉にときおり相づちをうちながら、静かに耳を傾けた。

亡くなったまさこさんの夫は、まさこさんより10歳年上で、ヨーロッパ系アメリカ人であった。二人が出会ったのは、1970年代、夫が日本に出張したときのことであった。当時まさこさんが通っていた神戸の教会で出会ったのである。結婚後、まさこさんにとってひとりの知り合いもいないカリフォルニアに引っ越してきてからは、彼女は夫をまるで父のように頼りにしてきた。夫は穏やかな人だったし、夫の家族との関係も淡白でわずらわされることもなく、経済的にも恵まれた結婚生活であった。まさこさんは専業主婦で、日系人の先生からフラワーアレンジメントを習って

いた。

まさこさんの夫はがんを患い、3年間手術と入院を繰り返して3年前に亡くなった。夫の死とともに一家の収入はなくなり、まさこさんが一家の働き手の役割を負わなければならなくなった。それまでアメリカで一度も働いた経験がなく英語もよくできなかったまさこさんは、どうしていいかすっかり途方に暮れてしまった。

このときまさこさんが思いついたのは、若いときから好きで続けてきたフラワーアレンジメントのことであった。たまたま近所の花屋で店員を募集しているのを知り、思い切ってその店に応募したところ幸運にも採用された。それ以来、その店で店員として働いて生活を支えてきた。

夫が亡くなってからの大変な時期に、まさこさんは体調を崩してしまった。唯一頼りにできたのは同居していた一人娘（当時大学生）だったが、娘は、毎日暗い顔をして愚痴をこぼす母親の面倒をみるのは荷が重いと言い始め、同級生であるボーイフレンドの家に宿泊することが多くなった。そしてある日突然、彼といずれ結婚するから家を出て彼と暮らしたいと言ってきた。

まさこさんは娘からの突然の申し入れにショックを受け、二人の間には絶え間ない激しい言い争いが繰り返された。結局、ある日、娘は黙って家を出て行った。このときからまさこさんはうつ状態になり、誰にも会いたくないと思うようになった。友人たちにも心を閉ざして泣き暮らし、仕事も教会も休みがちになった。今は聖書を読みたい気持ちもない。自分は神にも見捨てられたのではないかと思い、一時は自殺も考えたという。最近は食欲もなくよく眠れない日が多い。

「私は10代の頃から教会に通い、それ以来キリスト者として生きてきました。どんなときでも教会生活を大切にしてきたのです。でも、今は教会に行っても寂しく、空しいです。周りの人々は皆私のような悩みもなく幸せそうです。私はこの年になって外国でたったひとりぼっち、これから老いてゆく私を親身になって助けてくれる人もいません。私を捨てて出て行った娘をとても許せないです。いったい神様はいるんでしょうか。自分がみじめで、生きている価値もない人間のように感じます。」

黙ってまさこさんの話を聞いていた牧師は、ここでまさこさんに祈りの希望を尋ねた。まさこさんが、「私の心の平安のために祈ってください」と希望したので、そのように祈った。

パストラルケアの7つのステップ

さて、このケースへのパストラルケアはどのように実践され、どのような点を考察しなければならないだろか。ここでは、ドーリングの提示する7つのステップによって、例に挙げたケースを検討してみたい。

⑴　ケアを求める人の物語に共感的に耳を傾け、信頼関係を形成する。

ドーリングは、パストラルケアは、第一に、ケアを求める本人、その家族、コミュニティ、文化についての「物語（narratives）」に焦点を当てると述べる（Doehring, 2006, 166-167）。パストラルケアは、ケアを求める人が語るその「物語」にケアギバーが真摯に共感的に傾聴するところから始まる。この際、どのように傾聴してゆくか、人間関係のダイナミクスをどう理解するか、ボディランゲージをどのように利用するかなどは、カウンセリングを始めたとした多くの対人援助の方法と基本的に同じである（「モダンレンズ」）。ケアを求める人が安心して話すことができるような気持ちと気持ちのつながりは、カウンセリング用語で「リレーション」と言われる（稲富、2014、4）。

この際、大切なのは、ケアギバーのボディランゲージや言葉と、その人自身の価値観、信念、神学[7]とが一致していることである（Doehring, 2006, 45）。パストラルケアのあり方は、ケアギバーの人間関係能力や神学を正直に反映すると言われる（Ramsey, 2000, 278）。ケアギバーが、「神への愛と隣人愛がもっとも大切な掟である」と考えている場合には、その人が提供するパストラルケアにおいてもそれが体現されるだろうし、また体現されるようなコミュニケーション技術を磨かなければならない（Doehring, 2006, 36）。

まさこさんのケースの場合、牧師はまさこさんの切実な状況と苦しさをゆったりと共感的に受け止め、真摯に傾聴し、信頼関係を築いていったことによって、リレーションが早期に形成されたと考えられる。なお、パストラルケアの特徴として、共に祈り、聖書を読む、聖餐式をするなどの伝統的宗教的資源が用いられることがあげられる（「プリモダンレンズ」）が、牧師がまさこさんとの面接の終わりに彼女の希望を聞いて祈ったのは、その一例である。

⑵　ケアギバー自身の個人史や背景がどのようにケア関係に影響を与えているかを考察する。

ケアギバーの個人史や背景が、どのようにケアを求める人との関係に影響を与えているかを考察することも大切で

ある。たとえば、まさこさんと牧師の場合、牧師は、アメリカで暮らす日本人女性であるという点で、まさこさんと共通の経験を持っている。両者とも、外国で生活することに伴うプラス面（たとえば、日本での家族関係のわずらわしさからの自由）とマイナス面（たとえば、アメリカでの人種差別や女性差別の経験、言語など外国で暮らす困難さや望郷の念）を経験しているのである。しかし、牧師は30歳代で年齢的にはむしろまさこさんの娘に近く、アメリカで家族を持った経験もない。またいずれ日本に帰国することを考えており、アメリカに永住する気持ちはない。日本人高齢者としてのアメリカでの生活は、若い牧師にとってはまだ遠い将来のことのように思われる。

これらの点がパストラルケアにとって助けになっているかあるいは阻害しているかを考察することが、このステップの課題である。

⑶　ケアを求める人との間に、ケアを提供するための安全な枠組みを設定する。

ケアの関係作りにおいて次に考えなければならないのは、ケアを求める人との間にケアを提供するための安全な「枠組みの設定」をし「ケアの契約（contract）」をすることである。ケアを求める人がケア関係によって傷つけられるようなことがあってはならない。

パストラルケアにおいては通常、カウンセリングのように面接時間や場所という「枠組み」を厳しく設定するようなことはない。牧師が信徒の自宅を訪問することは教会ではよくあることだし、病院や学校におけるパストラルケアでも、面接をする時間や場所は非常にフレキシブルである。カウンセリングのようにカウンセラーとクライエントが話し合って「契約する」という形はとらないのが一般的なのである。しかしドーリングは、そのような特質を持つパストラルケアのもつ危険性について注意する。「契約」という明確な形をとらないパストラルケアにおいても、ケアギバーはプロフェッショナルとしての職業倫理に反する振る舞いがあってはならず、場合によっては職業倫理の問題についてケアを求める人と率直に話し合うことも必要だというのが彼女の考えである（Doehring, 2006, 48）。

パストラルケアにおける倫理の問題として典型的なものは、守秘義務（秘密保持）、二重関係の禁止（ケア関係の中に、性的関係、金銭貸借関係などの別の関係を持ち込んではならない）、セクシャルハラスメントの禁止である。加えて、プロフェッショナルとしての自分の職域と能力の限界を超えるようなケースの場合には他の専門家に協力を求めることも必要であり、ケアを求める人とケアギバーである自分の両者が、どの程度相手に感情的な近さを求めるかというバウンダリー（境界）の問題にも注意を払わなければならない[8]。

まさこさんのケースの場合に牧師が特に注意しなければならないのは、まさこさんとの間の感情的なバウンダリーの問題かもしれない。牧師はまさこさんの娘に近い年齢で女性でもあり、まさこさんにとって娘と同一視しやすい存在である。また、まさこさんが「眠れない、食欲がない」と訴えていることから、牧師としての職務の限界を考慮して、医師や臨床心理士に紹介することも考えてみるべきだろう。

⑷　グリーフなどの心理的問題を査定する。

ケアを求める人の物語に耳を傾けながら、ケアを求める人のもつ心理的問題について査定することも必要である。たとえばまさこさんの場合、彼女のグリーフ（悲嘆）は、急性期かあるいは長期間にわたってのものか、彼女は強い怒りや不信感、罪意識や悲しみなどを経験しているかいないか、食事や睡眠に問題はあるかないか、などについて査定する必要がある。またケアを求める人は、苦難や悲しみにどのようにコーピングしているか、またその方法はグリーフやストレスに耐える力を与えているか、親しい人たちとの人間関係を深めるのに助けになっているかなどについても検討する必要がある。まさこさんの強い悲しみは夫を亡くして以来３年間続いており、彼女は、娘や神に対する強い怒りや不信感、抑うつ感について語っている。最近は食欲もなく眠れない日が多いと語る彼女に、牧師は近隣の精神科クリニックを受診することも勧めた。

さらに、グリーフをもたらした人生の危機は、まさこさんのライフサイクルの中でどんな意味を持っているのかについても考えてみることができるだろう。まさこさんの喪失体験は、単に長年の配偶者の喪失というだけではない。婚姻関係の喪失でもあり、妻という役割やアイデンティティの喪失でもあり、安定した生活の喪失でもあり、長年の友人の喪失でもある。また、一家の中心人物がいなくなったという点で家族システムの危機でもある。そのようにいくつもの大きな喪失体験を抱えながら、まさこさんは自分の生活を立て直してそうとしているのである。

⑸　ケアを求める人が生きているコンテクストについて考察する。

心理学者ウォーデンは、グリーフ（悲嘆）に影響を与え

る要因のひとつとしての社会的変数の重要性について述べている。喪失に際して、家族や友人からどのような情緒的、社会的サポートを受けたか、喪失体験者は喪失体験前後にどのような社会的役割をもっていたか、どのような宗教的資源を利用したか、どのような民族固有の背景を持っていたかなどが、グリーフに大きな影響を与えるとされる（ウォーデン、2011、75-78）。

まさこさんは、アメリカ国籍を持った夫と日本で出会って恋愛し、国際結婚してアメリカに渡り、それ以来カリフォルニアに居住している。まさこさんのように、戦後1970年代頃までに国際結婚によって日本からアメリカに渡り「人種と国境という二つの境界線を越えようとして」（南川、2006）生きてきた女性たちの多くは、日本社会からは異人種間の国際結婚をした女性として偏見をもたれ、アメリカではアジア系女性移民への人種差別と性差別を経験したと語っている。また、アメリカ人として生まれ育った子どもたちとの考え方や生き方の違いに悩んだと語る女性も多い（Saito, 2014）。

まさこさんも、配偶者との死別体験のはるか以前から、アメリカ社会からの差別と偏見、日本の家族や友人との関係の疎遠と断絶、それらからくる自尊感情の傷つき、文化的アイデンティティの混乱など、いくつものストレスと喪失体験を抱えながら生きてきたと思われる。また夫との死別後も、子どもたちとの関係も含めて社会的に孤立しがちで、夫を失った後の生活の困難に際して周りから十分な情緒的、社会的サポートを得られなかったことが想像できる。

ケアを求める人の宗教経験、神や聖なるものとのつながりを理解する際にも、そのコンテクストが考慮されなければならない。まさこさんは、今は神を信じられないと訴えているが、かつてはどんなときに神とのつながりを感じていただろうか。賛美歌を歌っているときか、聖書の一節を読むときか、礼拝のときか、聖餐式においてか、教会の中で十字架を見たときか、自然や芸術の美しさを感じたときか、それとも日々の祈りにおいてだろうか（Doehring, 2006, 6）。

⑹　神学的な考察をし、神学的規範（norms）を提示する。

ドーリングは、「神学（theology）」とは、人々が自らの最も重要な価値について語るひとつの方法であると言う（Doehring, 2006, 111）。キリスト者はだれでも、その人なりに自分の信仰生活に深く根付いた素朴な神学や宗教的価値観（Embedded Theology）を持っている（Doehring, 2006, 112-113）。これは、キリスト者が人生の問題に出会ってそれへの信仰的答えを得ようとしたときに初めに頭に思い浮かべる神学であり、その人の人生経験のなかから出てきた素朴な信仰理解や信念でもある。

たとえば、まさこさんは、苦しみ、悲しみ、怒り、神のイメージ、愛、罪や恥の意識、絶望や希望について彼女なりの素朴な神学的理解、信仰理解を持っていると推測される。彼女は、自分はみじめで恥ずべき人間なので神から愛されない、あるいは、娘が親である自分に反抗して家を出たのは聖書に照らし合わせて間違っているなどという素朴な神学を持っているかもしれない。

一方で、そのような素朴な神学的確信、信仰理解をより深く考察することから生まれてくる神学や信仰理解もあり、ドーリングはこれを「熟慮された神学（Deliberative Theology）」と呼ぶ。ドーリングによれば、ケアを求める人がどの程度自分の体験を神学的に深めているかを知るには、以下のような項目について検討することが大切である（Doehring, 2006, 130-131）。たとえば、その人は自らの危機の体験をどの程度深く省察しているか、その人の信仰や体験は今回の人生の危機への対応に役に立ったか、長期にわたる「喪失体験後の意味の再構築」の作業に役に立ったか、喪失体験の苦しみに耐えるのに役に立ったか、その人の生活の中で信仰や神はどのように位置づけられているか、などである。

牧師とまさこさんが、今の苦しみや悲しみを通して神はまさこさんに何を伝えようとしておられるのか、この苦難の意味をどのように理解したらよいかをともに考えるとき、彼らは「熟慮された神学」を生み出すプロセスに関わっていると言える（Doehring, 2006, 112-113）。

まさこさんは語る。「夫が亡くなってから、ずっと生きるのがつらく、空しい。たったひとりぼっちでさびしくてたまらない。」私たちにとって、苦しみや悲しみを受け入れることはとても難しい課題であるため、悲しみやさびしさといった生の苦しい現実はしばしば私たちの目から遠ざけられがちである。

あるとき牧師は、ヨハネによる福音書12章のイエスのことばについてまさこさんと話し合った。一粒の麦が死ななければ実を結ぶことはできない、わたしたちが自分の命を失わなければそれを見出すことはできないというのである。死ななければ命を得られない、失わなければ永遠の命を見出せないとはどういうことなのだろうか。また、真の喜びは悲しみのただ中に隠されているとはどういうことなのだろうか。イエスの十字架上での死が同時に復活といのちのしるしでもあるというのはどういうことなのだろうか

（ナーウェン、1997、49-50）。牧師は、まさこさんが自分の体験を反芻しながらこれらのことを考えてゆくプロセスにじっくりとつきあっていった。

⑺　魂のいやしと絶望からの解放、希望をめざすケアプランを策定する。

以上の話し合いの中で、何がどのように問題となっているか、ケアを受ける人はこれからどう生きていこうとしているのかなどが見えてきたら、ケアギバーとケアを受ける人が今後の具体的なケアプランについて話し合うことになる。その際大切なのは、支援を求める人の安全に留意し信頼関係を築く、喪失を十分に悲しむ、新たな人生に踏み出す、という３つのステップを踏むことである（Doehring, 2006, 133以下）。

まず、まさこさんが現在自殺を考えていないか、身体的に安全かどうかを確認し、定期的に声掛けをする、電話をかけるなどして人間関係をつなげてゆくことが必要であろう。また、まさこさんが自分の悲しみをゆっくりとみつめ表現できるように、喪失体験の意味を考えることができるように、しばらくの間定期的に牧師と面接をすることを決めても良いだろう。その中で牧師は、まさこさんが神や聖なるものと再び絆を取り戻すためにはどのような宗教的、霊的な資源が役に立つか、教会はどのように彼女をサポートすることができるかについても検討してみる必要があるだろう。そしてそのなかから、牧師は、まさこさんが再び神への信頼と信仰の喜びを取り戻し、絶望を越えて新しく希望に満ちた人生を踏み出すことができるように、まさこさんを支援してゆくことになる。

Ⅳ　おわりに：今後の課題

最後に、筆者が現在日本の現場において直面しているパストラルケアの課題と、日本における今後の可能性や方向性について、ドーリングの言葉を引用しながら考察したい。

筆者は現在、日本の女子大学において若い人たちにキリスト教を教える立場にある教員であり、同大学でキリスト教教育に携わる牧師でもある。若い学生たちとの日々のつきあいのなかで、学生たちのさまざまな悩みや悲しみに触れることも多く、そんな彼女たちをどのようにケアしサポートすればよいのかと途方に暮れることもしばしばである。混沌とした現代社会に生きる若者たちに対して、伝統的なキリスト教の立場からアプローチするだけでは、もはや彼らの魂に触れることはできないことは明瞭である。しかし、いったいどうすればよいのだろうか。新しい時代にあったどんなモデルがあるのだろうか。そんな葛藤を抱えていた私にとって、ドーリングが明快に描いてみせるパストラルケアのモデルはまことにわかりやすく、新鮮であった。

しかし同時に、ドーリングの著書のコンテクストである欧米と違って「一神教の神の存在」を前提にしていない、キリスト教の土壌がない日本の文化や社会において、キリスト者ではない若い学生たちにキリスト教の「パストラルケア」を提供する場合には、どのようなことに気をつければ良いのか、また、ドーリングのパストラルケアのモデルは、欧米と文化の違う日本ではいったいどのように適用されるべきなのか、日本独自のモデルが必要ではないのか、という疑問ももたざるをえなかった。本稿を終えるにあたって、この２点について、ドーリング自身のことばから学びながら考察したい。

まず１つ目の点。ドーリングは同著の序文において、なぜこの本で「スピリチュアルケア（spiritual care）」ではなく、あえて「パストラルケア（pastoral care）」いう用語を用いるかについて説明している。「はじめに」で述べたように、「パストラルケア」という用語は、ユダヤ－キリスト教の伝統を連想させるものである。たとえアメリカに生きるキリスト教の牧師であっても、仏教やイスラーム教などキリスト教以外の宗教的伝統に生きる人々とケアの現場で出会うことが多い今日の世界において、特定の宗教を連想させる「パストラルケア」という用語を使い続けることは難しいとも言える[9]。キリスト教など特定の信仰の立場に立つ宗教者は、ともすれば自分の信仰の正統性に固執し、自分が信仰する宗教以外の信仰を持つ人々に心を開くことが難しいという欠点があるのも事実である。

しかし、ドーリングは、この著書であえて「パストラルケア」という用語を使った。それは、彼女が「スピリチュアルケア」という用語の問題点についても自覚しているからである。ドーリングは言う。「『スピリチュアルケア』という用語は、特定の宗教的コミュニティや宗教的伝統に立脚しない、個人主義的なケアを指すことが多い。このような個人主義的ケアは、各宗教が伝えてきた豊かな伝統（象徴の体系、儀式、音楽、聖典など）から得られる遺産を十分に援用することができない。」（Doehring, 2006, 6-7）。

では、自ら信ずる宗教や信仰の伝統に忠実でありながら、同時に他の宗教や信仰のあり方にも寛容であるにはどうしたらよいのだろうか。これはパストラルケアに携わる者にとって大きな課題である。ドーリングは、最近の論文で、

パストラルケアとは「神学的な訓練を受けたケア提供者が宗教的多様性という設定のもとで行うスピリチュアルケア」であると暫定的に定義し、パストラルケアはあくまでもキリスト教神学の営為ではあるが、同時にケアにおいては、宗教的多様性と互いの違いへの寛容さが認められなければならないという立場を明確にしている（Doehring, 2012, 2–3）。

また、2つ目の点について、ドーリングは、今日の世界においては、普遍的で超歴史的なパストラルケアの定義というものはありえないと述べる。このような立場をとるのは彼女だけではなく、たとえばクレプシュとジェイクル（W. A. Clebsh and C. E. Jaekle）は、パストラルケアの歴史を振り返り、歴史的に見るとパストラルケア提供者の数だけパストラルケアの方法があったと述べている（Clebsh and Jaekle, 1964）。

また、西アフリカ出身でイギリスやアメリカの神学大学院で長年教鞭をとってきたラーティ（Emmanuel Y. Larty）は、現代世界では、国や文化、コミュニティによってパストラルケアという用語の意味するところに違いがあることを受け入れるべきだと主張する。それぞれの文化固有のパストラルケアの方法があるというのである（Larty, 2002, 317–318）。ラーティは、コンテクストやものの見方の多様性に価値を置くパラダイムを「インターカルチュアル・アプローチ（intercultural approach）」と呼んだ（Lartey, 2003, 13）。ラーティに影響を受けたドーリングは、今日大切なのは、それぞれの文化、教派的伝統に基づいた暫定的なパストラルケアのあり方を明確にし、対話を通して互いに学び合うことだと主張する（Doehring, 2012, 2–3）。

私たちは、宗教が往々にして暴力や社会的危機を生む要因にもなりかねないという世界の現実の中で、若者たちにキリスト教を教え、パストラルケアを提供している。日本という非キリスト教社会においてキリスト教教育やパストラルケアに携わる私たちは、「他宗教への寛容」や「多様な価値観を持つ人との対話」をどのように理解し、どのように日々実践してゆくことができるのだろうか。そもそも、今日急速にグローバルな競争が進む世界に生きる私たちが、他者の立場の多様性を認め、対話し、受け入れ合うことは可能なのだろうか。筆者は、日本におけるパストラルケアや牧会神学の危急の課題は、さまざまな宗教的価値観や立場にある人々が、対話を通して相互に支援し合うことを目指すパストラルケアや牧会神学の枠組みとモデルを、日本というコンテクストにおいて具体的に検討することだと考える。

注

1　日本語では「牧会（的）」（プロテスタント教会）あるいは「司牧」（カトリック教会）と訳される。なお、ドーリングが彼女の著書で取り扱っているパストラルケアや牧会神学のコンテクストは、主に北米のリベラルな立場に立つプロテスタント教会である。

2　「パストラルケア」とは、教会を中心として行われる牧会上の働き全般を指す広い概念であるのに対して、「パストラルカウンセリング」は、パストラルケアの中で、牧師と支援を必要としている人との間の合意に基づいて牧師のオフィスなどで行われる主に短期のカウンセリングのことを指す。

3　このような背景のもとで、「コミュニティ ── コンテクスト重視のアプローチ」や「フェミニスト・アプローチ」、「異文化間アプローチ」など様々なアプローチが考察されるようになったことは、拙論　才藤千津子（2013）「1980年代以降アメリカにおけるプロテスタント牧会神学 ── 3つのアプローチ」で詳述した通りである。

4　そのような極端な例は現実的には考えにくいが、ここでは分かりやすく説明するために、あえてそのような例を想定してみた。

5　聖書批評学とは、聖書テキストの資料、筆者、成立年代、執筆の意図、構成、文体、歴史的背景などを研究する学問分野である。聖書批評学は、聖書や教会が持つ伝統的、絶対的権威に対する挑戦と見なされがちであった。

6　パストラルケアを提供するのは必ずしも牧師だけではない。近年では、一定の訓練を受けた信徒も、病院や教会を始めとしたさまざまな場所でパストラルケアに携わることが多い。よってこの論文では、パストラルケアを提供する人のことを、「牧師」ではなく、ドーリングにならって「ケアギバー（caregiver）」と呼んだ。

7　この場合「神学」とは、人々が自らの最も重要な価値観について語るひとつの方法だと考えられる。

8　アメリカの教会の各教派はそれぞれ独自の「倫理綱領」を定めているのが一般的である。その中では、子どもや高齢者への虐待があったときなど、守秘義務の例外措置についても述べられている。

9　この背景には、現在アメリカのキリスト教神学大学院において、ユダヤ教徒、仏教徒などキリスト教徒ではない人たちでパストラルケアを学ぼうとする学生が急速に増加している現状がある。

参考文献

Burck, J. R., & Hunter, R. J. (2005). Pastoral Theology, Protestant. In R. J. Hunter (ed.), *Dictionary of Pastoral Care and Counseling, Expanded Edition* 867–872. Nashville: Abingdon Press.

Clebsch, W. A. and C. E. Jaekle (1964). *Pastoral Care* in *Historical Perspective: Am Essay with Exhibits*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Doehring, C. (2012). Teaching Intercultural Approach to Spiritual Care. *The Journal of Pastoral Theology, 22* (2) Winter, 2–24.

_____. (2006). *The Practice of Pastoral Care: A Postmodern Approach*. Louisville, Kentucky: Westminster John Knox Press.

_____. (2002). Theological Literacy and Fluency in a New Millenium: A Pastoral Theological Perspective. In Rodney L. Petersen with Nancy M. Rourke (eds.). *Theological Literacy for the Twenty-First Century* 311–324. Grand Rapids: Eerdmans.

_____. (1999). A Method of Feminist and Womanist Theology. In B. Gill-Austern and B. Miller-McLemore (eds.). *Feminist and Womanist Pastoral Theology* 95–111. Nashville, TN: Abingdon Press.

Farley, E. Practical Theology, Protestant. (2005). In R. J. Hunter (ed.), *Dictionary of Pastoral Care and Counseling, Expanded Edition* 934–936. Nashville: Abingdon Press.

Gill-Austern, B. and Miller-McLemore, B. J. (eds.). (1999). *Feminist and Womanist Pastoral Theology*. Nashville, TN: Abingdon Press.

稲富祥彦（2014）『カウンセリングの技法 ── カウンセリングのプロセスと具体的な進め方』誠心書房

樋口和彦「牧会学」（1989）神田健次・関田寛雄・森野善右衛門編『総説実践神学』日本基督教団出版局

Hunter, R. J. (1995)「牧会神学」A. リチャードソン、J. ボウデン編、古屋安雄監修、佐柳文男訳『キリスト教神学事典』教文館、542–545

Lartey, E. Y. (2005). Globalization, Internationalization, and Indigenization of Pastoral Care and Counseling. In R. J. Hunter (ed.), *Dictionary of Pastoral Care and Counseling, Expanded Edition*. Nashville: 1392–1415. Abingdon Press.

_____. (2003). *In Living Color: An Intercultural Approach to Pastoral Care and Counseling*. 2nd ed. London: Jessica Kingsley Publishers.

_____. (2002). Pastoral Counseling in Multi-cultural Contexts. *American Journal of Pastoral Counseling*. 5: 3–4, 317–329.

Mills, L. O. (2005). Pastoral Care (History, Traditions, and Definitions), In R. Hunter (ed.), *Dictionary of Pastoral Care and Counseling, Expanded Edition* 836–844. Nashville: Abingdon Press.

Miller-McLemore, B. J. (1996). The Living Human Web: Pastoral theology at the Turn of the Century. In Stevenson-Moessner (Ed.), *Through the Eyes of Women* 9–26. Minneapolis: Fortress Press.

南川文里（2006）「日系人／日本人女性のアメリカ経験 ── 日系移民女性から留学ツーリズムまで」『神戸市立外国語大学外国語研究』66、27–41

H. ナーウェン（1997）大和田功一訳『いま、ここに生きる ── 生活の中の霊性』あめんどう

Ramsey, N. J. (2000). Truth, Power and Love: Challenges for Clergywomen across the Life Span. In J. Stevenson-Moessner, ed., *In Her Own Time: Women and Development Issues in Pastoral Care*, 269–83, Minneapolis: Fortress.

A. リチャードソン、J. ボウデン編、古屋安雄監修、佐柳文男訳（1995）『キリスト教神学事典』教文館

Saito, C. (2014) Bereavement and Meaning Reconstruction among Japanese Immigrant Widows: Living with Grief in a Place of Marginality and Liminality in the United States, *Pastoral Psychology*, 63: 39–55.

才藤千津子（2013）「1980年代以降アメリカにおけるプロテスタント牧会神学 ── ３つのアプローチ」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第30巻、63–76

ウォーデン、J. W.（2011）山本力監訳『悲嘆カウンセリング ── 臨床実践ハンドブック』誠信書房